

イスラム文明との対話

服部 英二

今日は「イスラム文明との対話」という題を提示しておりますが、それは二〇〇一年の九・一一事件以来、世界にイスラムというものが急浮上しまして、しかもそれがテロと結びついたネガティブな印象で語られることが多いからです。日本のメディアもそうだと思いますが、今の世界の平和の問題点はイスラムを巡った攻防である、とだいたいの人が思っておられるのではないのでしょうか。ところが実はイスラム教徒というのはそういった一部のテロリストではなしに、世界人口六五億の四分の一がイスラム教徒である。そして今の専門家の見通しによりますと、今世紀中にそれは世界の三分の一になるといいます。それは阻止できない傾向なのです。しかし、モラロジーという学問をやっておられる方はほとんどこの事に触れない。それではいけないというのが一つ、私が今日こういう題をあえて選ぶ理由であります。

これは数年前になりますが、新聞記事に、ある小学校の児童の書いた作文がありまして、非常に面白いと思ったのですが、「絵に書いた餅」という表現がありますね。最初そう言われるとこれは絵かと思う。ところがそれを何十回も何百回もこれが餅だと言われ続けると本当に餅に見えてくる、とい

うのです。この心理が応用されたもの、私はそれが世界に張りめぐらされたメディアの罫だと思えます。一九九三年にサミュエル・ハンチントンが有名な「文明の衝突」という論文を発表しましてから、それは本になったのは三年後ですけども、メディアが騒ぎ、宗教は戦うという虚像を作り出していく。世界を八つの文明に色分けしてそのそれぞれの頂点に宗教があるとします。その文明間に衝突が起こる、ということはおさず宗教間の戦いである、という結論に導くことになりました、九・一一事件がその実証とされた。それ以来メディアが繰り返すそのように報道しますものですが、ついに世界の多くの人が宗教というものは戦う、これは本当の虚像でありますけども、そのように考えるようになった。このような考え方がかなり定着した契機には報道のあり方があったのではないかと思うのです。

今日私が参考資料として用意したのは、一つは「今こそ対話の文明を創造せよ」という文章。これは来週出る予定の麗澤大学比較文明文化研究センターの「比文研ニューズレター」(No.15)用の文章であります。これが私の現在の心境です。そしてそこで紹介したのが後半のサウジアラビアのアブドラ国王による宗教間対話の呼び掛けです。それがどのような方向に進んでいるかということの報告であります。それからもう一つの方は、今年の三月の末であります、私が「日本―イスラム文明間対話」という日本政府(外務省)のプロジェクトによりましてクウェートに行った時に——このとき初めて「文明と環境」という今までイスラムとの対話の中では出てこなかったテーマが取り上げられたのでありますけども——その時に発表した文章であります。原文は英語ですが、ここにあります文章は、帰国後、自分自身で日本語に訳したものです。ご参考までに。この発表では当道徳科学研究センターが協力して訳した『科学と文化の対話』という本、それから、今日ご出席の中の多くの方も協力して訳出しようとしている、先ほど竹内先生が紹介された“Making Peace with the Earth”つまり『地球との和解』という本、これは秋に麗澤大学出版会から出します。その内容の一部を私はクウェ

ートで紹介して、地球を救うにはこの方向で行かなければいけないということを論じ、それに対しイスラム諸国の多くの参加者から非常に好意的な反響がありました。自分たちの所に来てくれないうかというような、またこの研究所と一緒にシンポジウムをやろうというような提案がありました。

そこでイスラム文明であります、日本文化とは根本的に違う、という印象があるかもしれません。異質な文明ではないかということですね。例えばこういうイメージ、これはメディナにありませんムハンマドのモスクでありますけども、日本人はおよそ違和感を感じたのではないのでしょうか。これはクウェートシティにありますブランドモスクで私も今回も行って参りましたが、これは新しいものです。しかしこれも全く異質と感じられませんか？ そういう世界と果たして対話できるのか、と、みなさんいぶかっておられるのでは。

そこで私はこの件について、私がユネスコに在勤していた頃に行いました「シルクロード総合調査」、それに「文明間の対話の道」という題を付けたものですが、実は「文明間の対話」という言葉は、国際機関の公式文書としては——このプロジェクトを私は仏英両文で執筆したのでありますけども——この冒頭に書いた言葉が始まりです。ここに書いてあるようにシルクロードは陸の道、海の道を問わず、何よりも文明間の対話の道であった。「何よりも」というのは、フランス語で *par excellence* (勝れての意味) です。

事実、一九八五年に私がこの調査計画を発表しました時に、この「文明間の対話」という言葉が、まるで磁石のように人々を引き寄せて、そして三年間の準備の後、ユネスコの公式事業としてこの調査を行ったわけです。ユネスコの調査隊はオアシスの道、草原の道——ステップの道とも言いますけれども——海の道の三つを踏破しました。オアシスの道というのは砂漠の道といってもいいのですが、これが一番中央を通っている道でタクラマカン砂漠を横断します。「絹の道」という言葉を最初

に使ったりヒトホーヘンはこの道を考えていたのです。イランから砂漠を通り長安に行く道です。ところがそのずつと北に、旧ソ連領ですが、今で言いますと一〇カ国くらいを通っていく草原の道、ステップの道があります。それから海の道、これもシルクロードだと定義したのは、このユネスコのシルクロード調査が初めてであります。対話の道の国際調査、この呼びかけに答えて三〇カ国が参加、三〇以上のシンポジウム、セミナーが生まれ、二〇〇〇人以上の学者が参加しています。

海の道に関しては、八世紀からインド洋の貿易の主であったオマーンが大きな役割をはたしました。実はシンドバッドの国です。「シンドバッドの冒険」という話をご存知かと思いますが、シンドバッドの冒険というアラビアの千一夜物語に出てくる話は実際の人物をモデルにしたものらしいのです。その出生地が今のオマーン。そのオマーンのカブス国王が自らのフルク・アル・サラマ（平和の方舟）という親衛艦を提供してくれまして、これをもって海の道をヴェネツィアからナニワの港まで辿ったわけです。寄港先で一六のセミナーが組まれました。シルクロードとか海のシルクロードをいうとき、皆が考える終点は、普通中国、特に長安なんですね。しかし私は、シルクロードが絹を運んだ、物を運んだというだけでは無しに思想を運んだ、というその方を強調するならば、遣隋使・遣唐使の道もまたシルクロードであると考え、まさしくその道の存在で日本では奈良がシルクロードの終着点、正倉院が正にそのシンボルであると言っているものですから、私が企画したこのプロジェクトではナニワの港までの航海を設定したのです。

今日は一時間しかありませんから、五年間かけた調査のコアの所だけしか申し上げられませんが、その中で私のみでなく参加した学者皆が感じたものが「文明史の歪み」であります。文明史に重要な部分に欠落している、ということでした。人類史に重要な役割を演じた中央アジア、中東、北アフリカの歴史が抜け落ちているのですね。例えばアンドレ・グンダー・フランクという学者はオアシスルートに参加したのですが、忽然として世界史の歪みというものに気がつき、書いた本が“Re Orient”で

す。藤原書店から邦訳もできています。これはここに参加した学者のほんの一例であります。

それでこの世界史の中で文明を語るとき、欠落している部分を見ていくと、特に欠落しているのが、なんとイスラム圏なのです。「イスラム圏」というのが不思議でしょう。実は昔の西アジア、例えばシリア、ペルシアが紀元前、素晴らしい帝国を作っていたときには、まだイスラムはないのです。それは七世紀に現れるのですから。紀元前のそのあたりは当然ながらイスラムじゃないわけです。ところがそれが欠落している、という現象が見られる。古代文明を語るとき、「今の」イスラム圏が欠落している、こういう事実が付きましました。そこに世界史の教科書を書いた西欧諸国のイスラムに対する偏見を見ないわけにはいけません。

ではこのイスラムとは何かということになってきますが、イスラム (Islam) という語自身は神への絶対的帰依を意味します。絶対服従。これがイスラムの意味です。これを説いた人、六一〇年といわれていますが（これは西暦です）、ムハンマドが齢四〇にして、アラビア半島のヒラー山の洞窟の中で天使ガブリエルから啓示を受ける。これが後のコーランすなわち神の言葉の書になるわけです。ここに出てくる天使ガブリエルですが、どのような天使ですか。ヘブライの天使です。キリスト教の天使でもあります。この同じ天使が降りてくるのですよ。大天使のガブリエルから啓示を受けて本当は非識字者（文盲）であったともいわれるムハンマドが教えを説きます。その動きを見えますと、私はだんだんこういう風に理解するようになりました。イスラムの人たちと語り、コーランを読み、伝記を読み、考えてゆくと、ムハンマドのやったことは他ならぬ本来のヘブライズムの原点への回帰であった、ということです。それを原理主義というならば原理主義です。

しかし一六世紀の初頭、ルターとカルヴァンの行った宗教改革、プロテスタンティズムと後に言われるもの、その動きもキリスト教の原点への回帰という意味で原理主義です。宗教界にはこういう回帰運動が時々起こります。その当時の、その社会的背景から生まれた一つの大きな動きが、このアラ

ビア半島ではムハンマドの啓示となりました。イスラムは、片倉もとこさんや色々な専門家がこれを「都市の文明」だと言っているのですが、私はこう思います。その当時を見ますと二回目のシルクロードの興隆期に当たっている。千年以上続くシルクロードの歴史には波がありまして、常にコンスタントにいつていない。その往来は紀元前二世紀ぐらいからぐっと高くなって、そしてそれが紀元後三世紀頃に少し落ちます。そして七世紀にまた高くなる、八世紀にはピークに達します。こうして波を打つシルクロードの興亡を見ると、ムハンマドがイスラムを説いた西暦での七世紀はその第二回目の興隆期に当たっているということに注目するのです。つまり、ダマスカス、バグダッド、ベルセポリス、コンスタンチノープル、アレキサンドリア、メッカ、メディナ、アデン、にルートがある。それがインドを経てシナに達している。こういう交易のルートがそこに新しい隊商都市を出現させる。その中にメッカもあり、メディナもあるわけですね。ですから確かに都市文明ではあるけれども、そこにはキヤラバン・シティという性格がある。そうした隊商都市を結び繁栄をもたらしたのはまさしく隊商の動きであったわけですね。したがって隊商、つまり多数のラクダを連れて団体で砂漠を横断した商人たちがいなければ、こうしたキヤラバンシティーズとしての都市文明もなかった。こういうことからやはり砂漠の民と切り離せない。いかなれば当時のイスラムはこの隊商都市に起こった生活の掟、皆が共に生きるための掟であります。従ってこれは非常にプラグマティックなものです。

実際にコーランを読まれるとわかりますけども、旧約聖書や福音書等と違うのは、生活の実践面を指導するものになっていることです。そこでアッラーという神ですが、これはセム族の神、「アル」のアラビア地方での呼び方です。これを「エル」と呼んでも間違いではありません。アラビア語には母音の表記がありませんから、その母音はアルになったりエル、これは同じことです。イスラムで最も重要なシャハーダ(信仰告白)の第一行は、日本語で表記するとこうなります。ラー・イラーハ・イッラッラー「La ilaha illa Allah (神の他に神は無い)」。こうなるのですが、板垣雄三先生はこ

れを No Deity but God' すなわち神は唯一である、と訳しています。しかしアッラーという言葉が神という一般名称でありながらアラビアの神、という性格を持っているということは否めない。これはチュニジアのファンタール教授から教わったことです。従って「アッラーのほかに神は無し」と訳してよいと思います。

それではムハンマドは何を行ったのか、それがヘブライズムの原点への回帰ということならば、またそこで新しいヘブライズムが起るはずですが、そうでは無しに、ヘブライズムというものがアラビア化していく。アラビア半島に転移することによってアラビア化していくのです。実際には礼拝という行為に現れています。日に五回、イスラム教徒は聖地に向かつての礼拝がありますね。実はあれは非常に大きな宗教的な意味を持っているのですが、どこに向かつて世界中の一五億のイスラム教徒が礼拝しているかというメッカ、アラビア語ではむしろ「マッカ」ですが、我々は通常使っているメッカという言葉を使いましょう。そちらを向いて礼拝している。しかしムハンマドの時はどうであったか、ムハンマドが生きていた時に彼自身礼拝をやっていました。どこへ向かってやっていたかというイエルサレムです。イエルサレムが聖地です。そこへ向かって礼拝をしていたのが、ムハンマドの死後、だんだんメッカの方に転じていく。これは象徴的なことなのです。いわゆるトランス・ポジション、「中心の転移」ということが行われたと思います。そこにフランス語でアラビテ *Arabité*、英語では *Arabity* なのですが、英語で聞いたことがないですね。「アラブ性」というものが生まれてくる。本当はイスラムとアラブは同一語じゃない。もちろんです。イスラムのほうをはるかに広い。インドネシアもイスラムですね。マレーシアだってイスラムです。アフガニスタンやパキスタンもそうです。しかしながらどうしてもここにアラビテというものが出てくるのです。従って世界にはこの二つを混同している人が多くいます。こういう所にいわゆる中心の転移が現れているのかなと思います。

このあたりにはメソポタミアからペルシアにかけて非常に多くの進んだ文明がありました。それからもちろん、ギリシアに文明が起ります。ついでギリシアを引き継ぐ形でローマに起こった文明もありました。ところが7世紀のこのイスラムの興隆によってアラビアに学問が導入される。この当時のイスラムとは、ムハンマド自身の言葉を引きますと、「知識を広く世界に求めよ。必要ならばシナまでも」であった。現在イスラム教国をみると全くその逆に閉じこもって、ヨーロッパ、先進国、特にアメリカを否定する姿勢が見られるのですが、ムハンマド自身の教えはその逆であったのです。知識を広く世界に求めよ、ということでありました。(ちなみに五箇条の誓文にも「知識を世界に求めよ」とあります。)

ところがなぜそのようなイスラムが歴史から消されていくのか、ということなのですが、やはり私は教科書のせいだと思えますね。教科書というのは昔からあったものではなく、実は学制というものが成立してから始まります。ところがヨーロッパで一番進んでいたフランスで義務教育が発足するのは一八八一年です。これは日本のみなさんは知っておいた方がいいですが、日本の学制の発布は一八七三年です。世界に先駆けたもので、ヨーロッパより日本のほうが早かったです。もちろんアメリカより早い。素晴らしいことですね、当時の明治政府がやったことは。フランスでの義務教育は一八八一年から、といましたが、それ以来教科書というものが問題になってくるのです。ですから歴史教科書というのも一九世紀末からと考えていただきたい。それにもうひとつ、教科書の役割というものは良き国民を作ることであったのです。民族国家そして統一国家としての。それが教科書というものが一般の書物と違うところなんです。この性格は世界的なのですが、良き国民を作るための書が教科書です。従ってこれはすべての国に言えるのですが、自国中心に書かれています。みなさんの中にはアメリカに行ってその教科書を読んだことがある方もおられると思いますが、アメリカの場合、教科書で世界が始まるというような感じで書かれるのはコロンブスから、もっといえばメイフラワー

号以降です。すぐに独立宣言。それが歴史なのです。それまでは前史みたいなもので、彼らの出身地であるヨーロッパでさえも我々がまるで古代を扱うような扱い。これが教科書なのです。もちろんヨーロッパ諸国も全て自分の国を中心に書きました。

そうした中で私は、普遍的な文明史を各国が書いてくれるようにとの願いを込めて、ユネスコによるシルクロード総合調査Integral Studyを提唱したのですが、その時にパリにある東洋専門のギメ美術館の館長のウラジミール・エリセーフ氏を諮問委員会の議長にお願いしました。私が世界史を書き換えるようなことをやりたいと申しましたら、彼は「あなたは三〇カ国の教育省と戦うつもりか」と言いました。教育省というのは全ての国において自国のプライドを植え付けるための機関だ。だからそのように書かれているのが歴史教科書だ、と。今国際機関の名でそれを修正しようと、文明史のひずみを正そうとするのは、少なくとも三〇カ国の教育省と戦う覚悟が要る、と言われたのを今でも覚えています。しかし、です。「文明間の対話の道」という一言が、結局はその三〇の国の教育省に置かれたユネスコ国内委員会を動かすことになったのです。

そこでヨーロッパの歴史ですが、皆さんもその引き写しで書かれた西洋史という学科を思い起こしていただきたい。急にギリシアから始まっています。そしてキリスト教、それが出会うとヨーロッパになる。ギリシアの科学つまりギリシアの理性ですね。それからキリスト教、これを合わせるとヨーロッパ。このような説明になっていますが、四世紀ローマでその二つが合体しまして、そしてシーザーの遠征の道、シーザーのガリア戦記という本がありますが、ガリアというのは現在のフランスです。ローヌ川沿いに北上する。ローヌ川は北から南に地中海に流れこんでいますね。それをずっと北上して行ってついにパリージというケルト人が住んでいたパリに入る、これがガリア戦記の道なのですが、この道を通ってキリスト教もヨーロッパに入る。こういう歴史の書き方をしていますと、エジプトは例外的に出てくるのですが、まずペルシアなどは出てこない。ギリシアの敵としてサラミスの

海戦に出るくらいです。エジプト自身がギリシアに与えた影響、それからキリスト教に与えた影響が出てこない。つまりヨーロッパの子供たちが習うのは、ギリシアという素晴らしい文明が、私はこれをウィーナスの誕生のように、といつているんですが、突如誕生する。ウィーナスという美の神はギリシア神話によりますと地中海の泡から生まれます。ポッティチェリの絵にもウィーナスの誕生があります、ああいうイメージですね。そういうイメージの歴史をヨーロッパの子供たちは習っている。しかも日本はそれを訳しましたから西洋史でそのようなことを私も中学生ぐらいの時、習いました。

そこではイスラム世界の貢献というものは、実質的にあつたのに除外されている。この文明の文脈に入りません。ではイスラムの貢献として何があつたかという点、ここに『一二世紀ルネッサンス』を書かれた伊東先生がおられますけども、簡単に述べますと、やはり中心は自然科学です。ギリシアの自然学と哲学の継承と発展、メソポタミアに始まる天文学のさらなる発展、それからインドからの数学概念をギリシアの数学と結んで発展させたイスラムの数学があります。その中心地はイスラムが八世紀初頭ジブラルタル海峡を越えて入ったスペインの南部アンダルシア、それから地中海の島シチリア、古代からの不動の中心、アレキサンドリア、それから、ビザンツという大帝国の首都、コンスタンティノープルですね。そういう所で盛んに学問が起こる。そして一二世紀にはそういったイスラムの科学が現在の西欧、オキシデントに入ってきます。ですからアンダルシアで一二世紀ルネッサンスが誕生したと言っている。アリストテレスに関してもその全集というものは実際には分散していて読めなかつた。ところがトレドの図書館にはアリストテレスが書いたギリシア語原典からのアラビア語での全訳が保存されていました。そして、ここが大切なんです、これをヨーロッパ人でアラビア語が堪能な人がラテン語に訳したのではなしに、(確かにカトリックの神父でアラビア語にも精通していた人もいましたけれども)アラビア人自身が協力している。それから重要なことはこの翻訳事業

へのユダヤ人の貢献です。つまりこの時期の学問の隆盛には、イスラム、ユダヤ、キリスト教の三者の協働があったということです。それによってアリストテレスのすべてがラテン語に訳されました。ラテン語に訳されたものが直ちに当時の中心的な神学校、パリのソルボンヌに伝わった。そしてこの時に大きな作業としてスコラ哲学というものが興ります。厳密にはスコラ哲学はその前にもありました、しかしそれがピークを迎えるのは一三世紀と私は見ております。その一三世紀のソルボンヌで大学者トマス・アキナス (Thomas Aquinas) がセミンナーを開きまして、Summa Theologiae (スンマ・テオロジエ) という本、(スンマ・テオロジカと書いたのは、その形容詞形で書かれることが多いので私もそうしましたが、本当はテオロジエ、所有格の語と書くのが正しい)。「神学の大全」、Summaなのです。集大成の意味です。これが、トマス・アキナスが行ったことではありますが、これは実はセミンナー形式でソルボンヌで行われた議論の結論です。

その議論に使われた言葉がリング・フランカ Lingua franca と言われるもので、ラテン語です。ラテン語ですが実はリング・フランカのラテン語は本来のラテン語とは違います。こういうことは国際言語年の研究会で話すべきことなのですが、リング・フランカは、実は易しい言葉なのです。私は京大で高田三郎先生に付いてこの「神学大全」の日本語訳のお手伝いをしたんですけども、二年くらい経ちましたら辞書なしで読めました。そのぐらいスンマ・テオロジカに使われているトマス・アキナスのラテン語は易しい。なぜならば彼は各国から集まった国際チームでセミンナーをやっていたからです。トマス自身イタリア人です。そこにスペイン人、バスク人、フランス人、ベルギー人、皆来ています。そこで話している共通語つまりリング・フランカがラテン語です。ですからアウグスチヌスが使ったような非常に難しいラテン語じゃなしに、皆が使える易しいラテン語になっているのです。従って Summa Theologiae という本は皆さんも少しラテン語をやれば読めます。しかし、この時気が付いたのですが、トマスは Summa Theologiae という本を書くとき、新しく訳されたばかり

のアリストテレスのラテン語版を使っているのです。それはトレドでアラビア語から訳されたものです。ギリシア語の原文は見えていない。それを使って、アウグスチヌスの神学、つまりプラトンに基づいた神学から転向するのです。Summa Theologicaという本は、基本的にはアリストテレスの形而上学と自然学を使ってキリスト教の教義を証明したものです。そこで、キリスト教の信仰とギリシアの理性が合成された、こういう風に申し上げたいと思います。そしてこのスコラ哲学こそがヨーロッパ文明の中核であり、アイデンティティであるのです。

EUはどうしてもトルコを入れようとしません。正しくこのことがギリシアのアリストテレスの自然学、形而上学とキリスト教の教義を集大成したものであるとしてのヨーロッパのアイデンティティを示しています。みなさんも勉強したと思いますけど、デカルトやカントは、スコラ哲学に対するアンチテーゼとしてしか本当は理解できない。このスコラ哲学のところを省略しますと、アンチテーゼの方だけを勉強しますから全然身に付かない。カントが求めていたもの、デカルトがそれを越えようと思っていたもの、そこにちゃんとスコラ哲学がある、ということがわからないと近代哲学も分からない。実はこれはヘーゲルまで続くと考えても宜しい。従ってキリスト教的形而上学が西洋文明の原理である。それを覆したものがニーチェであろう、と思うのです。ニーチェとハイテガー、このあたりから西洋文明への反省が明らかに始まります。やはりそのころ情報の伝達が進みまして、スコラ哲学とは全く異質なものが入ってくるのです。インドへの着目です。このときはまだ日本は入っていないのですが、インドに関しては明らかにニーチェとハイテガーに影響が見られる。ヘーゲル史観に対して、キルケゴール、ニーチェ、ハイテガー、ヤスパース、それからサルトル、ガブリエル・マルセル、の実存哲学が現れる。こういう風に言われるわけですけども、その元にあつたのはやはりそれを遡る形而上学であり、スコラ哲学を出発点にしたものです。それからの転換が近代哲学でありま

す。そこで実存哲学というのは反哲学、という風に定義してもいいかと思えます。

別の仕方ではイスラム文明の貢献の具体例をあげておきましょう。どのぐらいイスラムがヨーロッパ文明に入っているかの例証なのですが、例えば「chiffre」という言葉はフランス語で「数」という意味ですね。英語の「number」、フランス語で「chiffre」、イタリア語で「cifra」ですが、これはアラビア語の「sifr」から来ています。アラビア語でもって作られた数学がヨーロッパの近代科学のベースになるからです。一二世紀当時のアラビア語の「sifr」という言葉がまだフランス語の「chiffre」という言葉に残っているわけですね。でフランスといえばもちろん数学の国です。デカルトやパスカルも数学者です。デカルトの方程式は今でも日本の中学校で教えています。近代数学というものを作っているわけです。パスカルのほうは、気象学でヘクトパスカルとかでちゃんと名前まで使われている。ところがそういう科学、数学の国で、基本である数学の「数」という言葉自身がアラビア語である。前にAlcoholやAlgebra、「al」が付くものは全部アラビア語の語源だと言いましたけども「sifr」も同様です。ここで面白かったのは、ある国際会議でアラビアの人と議論していた教わったことですが「sifr」の観念自身がやはりインドの「Śūnya」からきている、「シュンヤ」というのはサンスクリット語で「空」です。空性という「Śūnyata」になります。この空の観念が一〇世紀頃インドから導入された、と向こうの学者は言っておりました。つまり「零」の概念が入ってきてそれによって十進法の近代数学が可能になった。この元々が「空」であった、「シュンヤ」が「ゼロ」になる。そこで「sifr」という言葉も「空」なんですけれども、そうすると「数」と「空」が区別できないということではラテン語のほうで「zephirum」という言葉が成立します。それが「zefiro」というふうになって「zero」という言葉になっていく。ですから「zero」というのも「Śūnya」所謂インド的な「空」の概念から生まれてきている、というのです。これこそが文明間の対話ですね。

ではこれだけの貢献をしたイスラム文明というものはなぜ歴史から抹殺されたのか。それにはやはり十字軍という事件を無視できない。場所は忘れてしまったのですが一つだけはっきりしていることがあります。それは十字軍に対する徹底抗戦という意味で「ジハード」Jihadという言葉が使われたことでもあります。もちろん「ジハード」という言葉自身はムハンマドの時に使われている言葉です。

「務め」という意味ですね。しかし「徹底抗戦としての務め」、あるいは「聖戦」と訳されるその意味でのジハードという言葉は十字軍の時に現れる。それから数世紀後、キリスト教の西欧が戦ったオスマントルコ帝国があります。この戦いは実に二〇世紀まで続いているわけです。こういうことが今のイスラム諸国の歴史からの抹殺に繋がっているのではないかとというのが私の観察であります。

植民地主義というのがありまして、これはみなさんもご存知の通り一五世紀の末に起こります。コロンブスのアメリカ発見は一四九二年です。バスコダガマの所謂、喜望峰を回ったインド航路の発見もほぼ同時に起こるわけですが、それから一六世紀という大航海の時代が始まる。そして一七世紀に科学革命、一八世紀の末に産業革命。それと同時にヨーロッパを覆ったのは啓蒙主義という時代であります。啓蒙主義とは全ての人間の能力のうち、理性だけを取り出してそれに絶対的な優位を与えるという立場であります。この一六、一七世紀は非常に面白いのですが、ヨーロッパでは宗教から科学への転向があった。川勝平太さんの言ったことを引用させていただくと、同じ頃、一六、一七世紀に日本では宗教から芸術への転向を行っているわけです。ところがこの頃、イスラム世界は何をしたか、実はその時にむしろ科学を捨てて、宗教に還る。それがイスラム世界がその後、所謂ヨーロッパという近代化に乗り遅れていく原因になるわけです。

さて、一九世紀以来の考え方をここに書いておきましたけれども、この Occident というのは西洋ですね、理性の光の世界のことです。それに対して Orient というのは神秘。西洋の科学に対して東

洋の神秘、という言い方がありました。ただ私は東洋という言葉は使いません。東洋という言葉は非常に曖昧だから使わないほうがいいと思います。オリエントとは東洋ではない。つまりOrientとはOccidentすなわち西欧ならざるものの総体であります。従って昨今では西洋というのを、The Westと英語では言いますが、The West and the rest、西世界とその他、残り、こういう感じになります。ですからOrientつまり東の方ではない、ヨーロッパから見るともつと西の方にあるようなモロッコのような国までOrientです。モロッコ料理のことをオリエンタル料理と言います。つまりOrientという言葉は地理的なものではない。昔のローマ帝国の分裂時代に使われたOccidentとOrientの意味は、一九世紀以来の考え方では失われています。

植民地主義の最大の罪は経済的な搾取を超えて、「精神の隷属」であろうかと思います。つまり宗主国というものが急速に、先ほどの理性主義によって、科学を振興させ、産業革命を成功させ、それまでちゃんとした文明を持っていた所謂The West and the restの方の国々を全て下位に見た、精神的に下のもと見た。精神的な隷属、これが植民地主義の行った最大の罪であろうと思います。ところがこの頃そういうことを行ったこの西洋諸国が、アジア諸国、つまり中国、韓国、それから日本の前に現れる。注意しなければいけないのは、それは本当の伝統的な西洋ではなかった、ということ。しばらく前に自らの精神的な伝統を断ち切った西洋が東アジアの国々の前に現れたのです。しかも、伝統を失った民族（つまり西洋の列強のことですが）が、伝統を維持していた民族を精神的に下位に置いた。日本は一九世紀にそういう風に変貌した西洋と出会いました。特にペリーの黒船が象徴しているんですけども、やってきた西洋とはそういうものであった。日本人は非常に驚いて、まさに危機感を抱いて鹿鳴館の開国を行う。鹿鳴館というのを皆さんご存知だと思わなくて、その頃の日本に急にヨーロッパ方式のパレスを建てて、いわゆる社交界を開いたんですね。紳士淑女が夜会服に身を包み、日本女性も着物からその頃着慣れない長いドレスの洋服に着替えて、全く

ヨーロッパ風に踊りました。この鹿鳴館は、今はないですが、実はトルコのイスタンブールに行ったらトルコ版鹿鳴館が実在するので見て下さい。全くヨーロッパ風に作ってあって、日本の開国を模範としたケマル・アタチュルクが作ったものですから、その面影を偲ぶことができます。日本はそういった鹿鳴館的な開国を行ったわけです。「文明開化」、これはみなさんもご存知の福沢諭吉のキャッチフレーズであります。但し、明治時代には同時に「和魂洋才」ということも言われているのです。

日本の魂だけはおこう、ヨーロッパの学問を学びながら日本の魂は保持しようという、こういう動きがありました。ところで一九世紀にそういう形で鹿鳴館の開国したのが日本の西欧との接触の最初かといいますと、そうでは無しに日本の近代化というのは、実は一六世紀から始まっていたという事に注意しなければいけない。日本はヨーロッパに対する窓を作っていた。ヴェネツィアは「東方に開かれた窓」と別名を持っているのですが、日本にも長崎という「西に開かれた窓」があった。もう一つ忘れてはいけないうのが堺ですね。堺もまた世界に開かれた窓であったわけです。なぜ堺のほうは皆が言わないのかと申しますと、オランダ船がやってきたのは長崎だけだったんですね。長崎にオランダ船がきて、他のヨーロッパの国は入れなかつたというのはいずれも皆さんもご存知の通りなのですが、実は中国船は全部入っています。堺に来たのも中国船なんです、全てヨーロッパのものを持ってきているわけです。つまり日本の鎖国とは本当は鎖国ではなかつた。西欧の情報はことごとく入っていたのです。もう一つは封建社会なのですが、『文明の生熟史観』で言う通り、西洋と日本は非常に似ていることがあります。封建社会というものが一つの近代的統治制度の基本になります。つまり廃藩置県ということがさつとできた基本に封建社会、江戸時代における統治制度があった。しかしこれを持ち出すと長くなりますので今日の主題でありますイスラムのことに帰りたいと思います。

ところイスラムの「恨」(ハン)と書きましたが、それがあると、私は前々からイスラムの人々、

一五カ国以上のイスラム国家の知識人と会い、考えたんですが、それは世界史におけるイスラムの貢献、先ほど少しだけ例を挙げましたけれども、それらを完全に無視されている、ということに対する、無意識のうちのハン、恨みがある、ということですね。無視されるということは本当の差別なんですね。これが忘れてはいけないことです。イスラム原理主義者の心中にはこの無視＝不公平、*Fair, injustice*に対する恨、*resentment*があります。ルサンティマンはフランス語ですが、ニーチェも自分の本でそのまま使っています。これを考えなくてはいけない。マーティ・エルマンジャラという人が出した本によればそれは *Humiliation* (屈辱) という感情になるのです。

こういうことが、テロリストの一番の深い所にあるのではないか、と私は考えております。所謂、人間の尊厳の無視です。それに対する恨。ですから本当は貧富の格差でテロを語ってはいけないのです。いじめの構造こそが問題なのです。文明史を語るに当たって、消去法によっていじめたということですね。人間の尊厳を損なう *injustice* というもの、正義の欠如すなわち不公平こそが真の原因であると、私は思っています。

それに、これはまた別の時間が必要なことまで提示しておきましたけれども、力の文明を精神文明の上位におく、相手を力でねじ伏せる、という従来のブッシュ・ドクトリンは、ゾロアスター的善悪二元論に帰着する、と言えます。自分が善、文明を守るもの、相手は悪、文明を壊すもの、と決めなければ、戦争は終わらない。暴力には暴力が、憎悪には憎悪が返ってきます。対話路線を掲げるオバマ大統領の新しいアメリカに期待したいですね。

オバマさんは、就任以来ブッシュ氏と一線を画し、いい方向にアメリカをもっていこうとしています。地球環境問題を直視したグリーン・ニューディール政策、国際社会との協調の姿勢等は評価すべきものです。今までは「アメリカと世界」という言葉が、ローマ教皇の復活祭での説教 *Ubi et orbi* (ローマの内外への意) という感じで使われていました。オバマさんになって、アメリカは再び、真

に「世界の一員」となってくれることを期待します。そのためには異文化理解が必要です。その点私はまだいささかの危惧をもっています。例えば、イラクから撤退すると同時にアフガニスタンに兵力を投入する、との外交政策は、この地方に住む民族に対する無知からとしか思えません。この山岳地帯に進攻したものは、先ほどのダレイオス、アレクサンダーを含め、最近のソ連軍まで、すべて撤退を余儀なくされているのです。

さて、日本とイスラム世界とでは、何か一致するものがあるでしょうか。先ほど二つのモスクの画を見ていただいた時に皆さんが感じたはずの違和感、これはそのまま認めましょう。極めて厳しい超越的一神教の戒律の世界と、八百万の神の世界、戒律不在の精神風土をもつ日本では、およそ別世界の感を抱く人が多いのではないのでしょうか。

しかし実はこの両者には思いがけない一致点があるのです。まず、これは私が「一神教と多神教」という論文に書いたことですが、『出会いの風景』にはその短編を収録しました。日本の多神教は、実は「現し身」（表れ）である諸々の神仏を通して一者を透視する、限りなく一神教に近いものなのです。ですからここに、イスラムの根本的な概念であるタウヒード (Tawhid) との類似性を見るのが可能なのです。タウヒードの思想は、政俗不二あるいは政教一致と訳されますが、基は一なる神が万物に顕現している、の意なのです。早くからイスラムが渡来した中国、泉州の回教寺院、清浄寺に掲げられた扁額に、「萬殊一本」とあるのがそれです。これは「一切即一、一即一切」とする華嚴の思想、また禅の「一即多、多即一」に通じるものです。神が万有に顕現している、とは「草木国土悉皆成仏」を説いた日本の天台密教、「天台本覚論」の思想と一致するものです。

ですから、イスラムにおける、一なる神の創造主という性格を除けば、その思想にはわれわれの世界と通底するものがあるのです。廣池千九郎も「万有相関」を「相互依存の法則」と表現していま

す。

日本は欧米に先立ち、二〇〇二年から「日本―イスラム文明間対話」を開始しました。これはユネスコの主導した「文明間対話・国際年」の二〇〇一年、中東を訪問した、時の外務大臣河野洋平氏の提唱にイスラム諸国がこぞって応じたもので、外務省中東局が事務局となり、東京とイスラム諸国を結んですでに七回開かれています。私はそのうちの五回に参加したのですが、二〇〇八年、サウジアラビアのアブドラ国王はこの会議の折に、自ら考え抜いた「宗教間対話」の決意を発表され、それが直ちにメッカの全イスラム会議、マドリッドでのカルロス国王との共催になる三〇〇名の参加者を集めた世界宗教の対話会議、さらにニューヨーク国連本部での大々的な「平和の文化」シンポジウムとなったのです。これには一〇名の国家元首が出席しました。

このようなイスラム文明との対話は、継続することに意義があると信じます。ラテン語のことわざに *Virtus est habitus* とあります。継続が *Virtue* すなわち力を生み出すのです。